

かねざわ 第44号

平成25(2013)年2月

“わ”の会へ

積極的な関わりを！

- 会報・ホームページへの寄稿・校正、運営委員等に -



目次

運営委員会からのお知らせ

- 2 分科会代表との連絡会議報告
- 4 「フォーラム KANAZAWA」のご案内
- 5 継続会員の状況と新規会員募集
- 5 会報・ホームページへの寄稿の活発化
- 6 会報・ホームページの校正作業へのご協力をお願い
- 6 運営委員募集のご案内

学習会

- 7 学習会の概要とアンケート結果
第7回 「金沢合戦と上杉氏」

分科会からの便り

- 9 「懐かしの映画鑑賞録」 No.9 佐藤 晃
- 13 「浮雲俳句会」抄録 No.20 北野 清市
- 17 「ふれあいの道歩こう会」
10周年記念事業ご案内(Ⅱ) 宮原 宏至
- 18 「寺社を巡る会」バス旅行記
『日蓮上人誕生の地を訪ねる』 吉田 壽紀

会員からの寄稿

- 20 「無法松の一生」を懐かしむ 渡邊 紀一
- 22 納富 優 氏を悼む 熊谷 哲 小俣 悦男

歴史研究

- 24 『吾妻鏡』を読む(7) 小倉 英明

行事予定

- 26 2013年3月～5月の予定



金沢区生涯学習“わ”の会

ホームページ：<http://kanazawa-wanokai.in.coocan.jp/>

メー ル：yokohama.kanazawa.wanokai@gmail.com

分科会代表との連絡会議報告

平成 24 年 12 月 15 日（土）の午後 3時から、金沢区役所一階の区民活動センター会議室で、「分科会代表との連絡会議」が開かれた。この会議は分科会の各代表と“わ”の会全体の運営に携わる運営委員会の全メンバーが参加して毎年年末に開催されており、今回で 8 回目となる。議事の項目と内容は次の通りであった。

1. 小俣代表挨拶

平成 24 年度の会員は 121 名であるが、そのうちの 112 名が平成 25 年度への会員継続手続きを行った。継続率を見ると 92.5%となり、過去最高水準である。これは学習会と分科会が“わ”の会推進における車の両輪の役目を果たした結果で、学習会もさることながら、各分科会活動のなせるところであり、6 名の各分科会代表のけん引力のお陰が大と受け止めております。本日は活発な意見交換を行うことで今後のさらなる“わ”の会発展へと繋げたく考えております。

2. 分科会の今年度の活動状況と来年度の予定

(1) 「寺社を巡る会」(松本代表)

- ・平成 24 年度の会員数は 47 名。その内、休会扱いが 5 名。毎回の行事参加は 35 名程度。分科会行事は毎月第 1 木曜日で年間 12 回の開催。その内の 10 回は寺社巡りで、4 班体制での会員によるガイドと鎌倉ガイド協会によるガイドの組合せで、主として金沢区外の寺社を巡拝。あとの 2 回は座学。4 班体制は平成 23 年度からで、平成 25 年度まではこの体制で進める。
- ・平成 25 年度は金沢区内の札所を中心とした寺社巡りを計画。ガイドは各 4 班が 2 回で合計 8 回、桜と紅葉の季節の 2 回は鎌倉ガイド協会

に依頼する。

(2) 古文書を読む会 (真田代表)

- ・発足して 10 年。8 名でスタートしたが、現在の会員数は 18 名。平成 24 年 4 月からでは 4 名入会、5 名退会。平成 24 年度は、第 1 学習日(毎月の第 2 木曜日)で金沢区内旧家の古文書、第 2 学習日(毎月の第 4 木曜日)で神奈川県内の興味ある出来事に関する古文書を読んだ。また初心者向の基礎講座を 8 回(6～9 月)実施。平成 24 年 1 月からホームページに学習記録の掲載を始めた。

- ・平成 25 年度では、第 1 学習日は柴村斉田家文書、第 2 学習日は伊豆・富士・大山などの道中記を読む。また、基礎講座を 2 月から再開し、12 月まで継続する。講座の開催は第 1 および第 2 学習会の学習会に先立つ 1 時間とする。教材は『東海道中膝栗毛』の川崎宿から箱根宿までを予定。

(3) ふれあいの道歩こう会 (宮原代表)

- ・平成 25 年 1 月の通算 88 回までは、1 都 6 県によって「関東ふれあいの道」として設定されたコースを主として歩き、この回をもって設定の全コース踏破を達成。各都県のコースを踏破するごとに各コースに定められた撮影ポイントでの写真と感想文を所管の都または県庁へ提出してきた。

- ・平成 25 年 2 月の 89 回からは好評であった場所を含めて独自コースを企画し、活動を継続する。

(4) 懐かしの映画を観る会 (佐藤代表)

- ・平成 16 年の設立で、現在の会員数は 71 名。その内、女性が 22 名で、30%の比率。平成 24 年度は月 2 回、年 24 回の鑑賞会を開催。各回の参加者は 50 名以上が 7 回、40 名以上が 8 回、30 名以上が 3 回であった。

・平成 25 年度については、1 月に平成 16～20 年の鑑賞リストを会員へ配布し、アンケートを実施。アンケートでの上位 4 本を 3 か月に 1 回鑑賞することを盛り込んだ平成 25 年度計画を 3 月に作る。これには、楽しい映画、例えば『007』等も取上げたい。

・金沢地区センターの利用者懇談会で「①利用予約が 1 か月前からとなっているが、他のセンターと同じように 2 か月前にして欲しい、②センター内での食事禁止も同じように改善して欲しい」の 2 点を提案したが、ともに却下された。“わ”の会としてのバックアップをお願いしたい。

(5) 浮雲俳句会(北野代表)

・今年度は兼題の一つを山岳として句会を開催。句会ごとに約 70 句から、天・地・人賞を選出している。

・平成 25 年度は海洋をテーマにした俳句にアタックしたい

(6) パソコンを使いこなす会(林代表：都合により欠席。事前に提出頂いた資料による報告)

・現在の会員数は 23 名。年度内の入会は 2 名退会は 1 名。WORD の復習、EXCEL の学習、習得技術を応用した写真付きカレンダーの作成、インターネット上での情報の共有を勉強した。

・平成 25 年度については、会員の希望を聞くなどして検討中。

3. 分科会 10 周年記念事業

平成 24 年度に記念事業を実施の分科会からの実施報告と、予定が近い分科会からの計画状況の説明があった。

(1) 古文書を読む会(真田代表)

・平成 24 年 4 月に冊子「道標等で迎える金沢道」発行。平成 24 年度総会後の第 1 回学習会で同テーマにて記念講演を実施した。

(2) ふれあいの道歩こう会(宮原代表)

・平成 25 年 4 月 3 日に 10 周年記念ハイキングとパーティを計画。分科会会員以外の方も大い

に歓迎する。

・既刊記録集である第 1 集：神奈川、第 2 集：東京・埼玉・群馬に続き、第 3 集：栃木・茨城・千葉を総集編を兼ねて発行する。

(3) 懐かしの映画を観る会(佐藤代表)

・平成 26 年に向けて検討中。

(4) 浮雲俳句会(北野代表)

・平成 25 年 7 月で満 7 年になる。方向性を決めて、具体的な姿を検討中。

4. “わ”の会の運営に関する事項

(1) 平成 25 年度の運営委員会の体制について(小俣代表・今井委員)

・小俣代表は 2 期 4 年と定めた会則に則って平成 24 年度で任期満了となり退任、新年度からは今井委員が代表に、小俣代表が顧問に就任することを同じく会則に則って運営委員会で決定したことを報告。また、内田副代表と相川委員は平成 24 年度末で退任を予定。

・平成 25 年度における運営委員とその役割分担を紹介。

(2) 平成 25 年度学習会(今井委員)

・平成 25 年度学習会予定の最新状況を報告。

(3) “わ”の会 15 周年事業(今井委員)

平成 25 年度で“わ”の会は 15 年目に入る。これを記念して

①記念講演とパーティを予定。記念講演会のテーマは「大橋新太郎生誕 150 年」で、講師などの詳細を検討中。

②『新版かなざわの歴史事典』重版を検討中。数量は 200～300 部の予定。

(4) 会報について(大門委員)

・会報 41 号(平成 24 年 5 月発行)から、呼称を「かねざわ」とし、表紙デザインを一新。
・各分科会から参加の会報編集委員については、平成 25 年度に継続をお願いします。

・会報・ホームページともに校正ミス対策として、校正の得意な方の参加を募っている。そのような方をご存知ならば紹介をお願いします。

(5) ホームページについて(金間副代表)

・平成 23 年 12 月から「浮雲俳句会」秀句のページに天・地・人句に加えて特選句も掲載開始。平成 24 年 1 月から「古文書を読む会」学習記録のページを開設。平成 24 年 6 月から「会員の寄稿」のページでテーマを定めた写真集募集を開始し、寄稿の促進があった。

・ホームページに掲載する情報をサーバーに転送できる形式に変換したり、変換した情報をサーバーに転送するなどのホームページの維持・管理の業務を現在は 1 人で担当。これを複数人体制にするために、人材を募集している。そのような技術を持ったり、関心のある人をご存知ならば紹介をお願いします。

(5) フォーラム KANAZAWA について (相川委員)

・平成 25 年から参加の呼び掛け範囲を従来の 170 の区役所の指導で立ち上げた生涯学習団体及び街の先生から、400 の活動センターに登録された団体・街の先生に拡大した。その結果、参加数は 20%アップの約 70 の登録個人または団体となった。

・“わ”の会は従来通りのパネル展示で参加することとし、昨年度のパネルを改訂した案を説明し、了解を得た。

「フォーラム KANAZAWA」のご案内

昨年までは生涯学習や地域活動に携わっている「生涯学習団体」や「街の先生」に呼び掛けて開催してきた「フォーラム KANAZAWA」は今年から呼びかけ団体を金沢区民活動センターに登録している全ての団体・街の先生に拡大しました。その結果、呼びかけ団体・先生は 170 から 400 に増え、参加団体・先生は昨年の 58 から今年 70 に増えました。

例年 3 月初旬に開催してきましたが、今年は 3 月第 2 日曜日となりました。

活動状況を多くの金沢区民に紹介し、活動への参加を呼び掛けると同時に区民との交流、出展団体・街の先生同士の交流をはかることを目的にしています。

参加団体の数も増え、種類も多様化し従来のフォーラムとは異なる面白さも出てくることでしょう。“わ”の会は第 1 回から参加しています。是非共、多くの会員の皆様方にご来場いただき、にぎわして頂きたいようお願い申し上げます。

日 時 : 2013 年 3 月 10 日 (日) 10 時~15 時 30 分

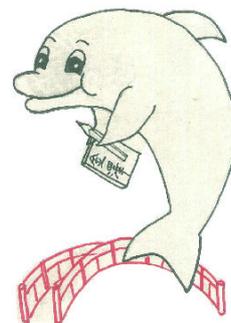
場 所 : 能見台地区センター

内 容 : 展示、体験、演技、演奏、野外観察、そば打ち・試食など

参加費 : 無料 (一部実費負担あり)

*詳細は「フォーラム KANAZAWA」のパンフレットまたは区役所のホームページ

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kanazawa/chishin/shogaku/forum2013.html> をご覧ください。



フォーラム KANAZAWA
イメージ・キャラクター
“ぶんこのイルぶん”

継続会員の状況と新規会員募集

継続会員：112名、継続率：92.6%

昨年11月末に締め切りました継続会員募集の結果ですが、2013年度への継続は112名、退会は9名、継続率は92.6%となりました。

毎年、90%以上の継続率が続いております。これは会員の皆様方が“わ”の会へ愛着心を持って参加されている証であると思っております。

新規会員募集：2月12日から10名程度

2013年度の新規会員募集は、2月12日から区民活動センターと各地区センターに募

集チラシを配置し、ホームページにも掲載することで開始しました。また、3月10日の「フォーラム KANAZAWA2013」会場でも募集を行います。これに合わせて応募の締切りはフォーラムの当日としています。

募集人数は、学習会で使用する地区センターなどの会場の定員の都合で、総会員数は120名を上限とせざるをえず、10名とします。

平均年齢の高まりと女性が少ないことから、若い方と女性会員の増加を期待しております。

会報・ホームページへの寄稿の活発化

会報とホームページは、①運営委員会と会員の皆様、②分科会と会員の皆様、③会員と会員の皆様に結ぶという3つの役割があります。3つ目の会員と会員の皆様に結ぶ場として、会報では「歴史研究」と「会員の寄稿」のページを、ホームページでは「会員の寄稿」のページを設け、金沢の歴史に関する会員各位の調査・研究の成果報告書、“わ”の会や分科会行事への参加の感想文、個人的な旅行記や随筆、金沢の風景や行事に関する写真集などの寄稿を頂き、掲載しています。また、ホームページでは会員の皆様から頂いた情報を委員会で整理して報告する「レポート」のページを始めました。お陰さまで、会報・ホームページともに会員の皆様から継続的に寄稿があり、会員の皆様の間を結ぶ道具としての役割を果たしています。

会報編集委員会とホームページ委員会では常に門戸を開いて会員の皆様からの寄稿をお待ちしていますが、残念ながら寄稿者に広がりがあり無なのが問題です。「寄稿」という言葉と、これまでに掲載してきたものを見ると、内容や仕上がりに格調の高いものが多いという点から、多くの会員の皆様には敷居の高いものを感じられているのではないかと危惧しております。

寄稿の内容については、“わ”の会の趣旨を逸

脱しないもの、不適切な内容を含まないものであれば大丈夫です。「どこかでこんな面白い話を聞いたよ」、あるいは「あそこは行けばこんな面白いものが見られるよ」というような情報提供でも大丈夫です。また、“わ”の会でこんなことをしたら面白いのでは、あるいは「こんな分科会を作ったらよいので」などの提言、会報・ホームページの掲載記事に対する感想や意見も良いかと思えます。1件当たり150字から200字程度として、「情報コーナー」あるいは「投稿コーナー」に掲載ということもできます。

寄稿の形式については、これまでは原稿の形に仕上げ提供して頂いておりました。この方が委員会としては有難いですが、ホームページで始めた「レポート」のように、素材の提供を頂き、後は委員会で原稿にまとめる、あるいはもっと簡単にお話しを頂いて委員会で原稿にまとめるということも可能です。

会報の良き読者・ホームページの良き閲覧者であるとともに、寄稿者・情報提供者・情報発信者としてご参加を頂き、会報・ホームページを会員の皆様相互の親睦をさらに深める道具としてより活発に利用していただきたく存じます。また、そのための会報・ホームページへの苦言・提言を歓迎いたします。

会報・ホームページの校正作業へのご協力のお願い

最近、会報とホームページで校正ミスの発生頻度が高くなっています。編集委員会の各メンバーは頑張っていますが、トータルとしての校正の力が弱まっていると思います。校正ミスの少なかった時期のことを思い出してみると、編集委員会のメンバー以外に校正の得意なゴールキーパー的な人の存在がありました。編集委員会では校正済みとした最終稿をその人に見せると、その瞬間にミスの指摘がありました。

編集作業の担当者が編集完了と考えた最終稿について校正作業を行うには限界があります。第三者の目で校正を行うことが必要です。校正ミスについては感度の高低が個人によってかなりあるようです。会報・ホームページの校正ミスが気になる会員様には適正があると思います。校正作業を手伝っていただける会員様はご連絡下さい。

運営委員募集のご案内

学習会のたびに会員の皆様から提出して頂いておりますアンケートは、学習会直後の運営委員会で回覧し、運営委員全員で拝読しております。そのなかで“運営委員の皆様ご苦労様”とか“良い資料を有難う”などの添え書きがあるのを見つけると、“少しは会員の皆様方にお役に立っているのだ”との満足感・充実感を覚えます。

現在、運営委員会には13人の委員がいますが、各委員が議論・協力して学習会などの企画・準備・実施に携わることで、委員相互の交流を深め、上記のような満足感・充実感を得ています。

このように考えると、運営委員会は“お”の会の運営ということを通じて人との交流・満足

感・充実感を得ようとして集まった人の集団であり、「寺社を巡る会」や「古文書を読む会」などの6つの分科会と同列の7つ目の分科会とも考えられる側面を持っています。

時には激しい議論や難しい問題への対応もありますが、運営委員会もボランティア活動ですから、それが精神的ストレスになるような委員会ではありません。個人の得手、不得手に応じて役割分担をし、他の分科会と同様に、適度な義務感と刺激のもとで活動しています。

こんな運営委員へのご参加をお待ちしております。まずは一度、運営委員会を覗いて見てください。また、運営委員にふさわしく、推薦したい会員をご存知でしたらお知らせください

直近の運営委員会日程

日	時間	場所
2月23日(土)	9:30~12:00	金沢区民活動センター (金沢区役所1階)
3月16日(土)		

問合せ・連絡先

電話	782-8147(小俣)
電子メール	yokohama.kanazawa.wanokai@gmail.com

学習会の概要とアンケート結果

第 7 回 「金沢合戦と上杉氏」

開催日：平成 24 年 11 月 10 日（土）

会 場：能見台地区センター

講 師：『新版かねざわの歴史事典』編集委員長 熊谷 哲 氏

出 席：88 名（内ビジター 2 名） 会員出席率： 71.0%

概要

① 永享の乱までの時代の流れ

元弘 3 年（1333）鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇による建武の新政が成ったが、この王政復古は論功行賞をめぐる多くの武士たちの反感を買い、失敗に終わった。この機運を逃さず、足利尊氏はもともと源義家の流れをくむ源氏の嫡流であることなどから関東を中心に武士の信頼が厚いことを支えとして、武家政治の復活を策し、後醍醐朝廷と対立。遂に建武 3 年（1336）後醍醐天皇は破れて吉野へ逃れ（南朝）、尊氏は京都に光明天皇を立てて（北朝）、以後約 60 年間の南北朝時代の混乱期となる。

かくして尊氏は室町幕府を開くとともに建武 5 年（1338）には北朝から征夷大將軍に任ぜられた。関東に思いの強かった尊氏は、京都の室町に幕府を開くとともに、関東武士の拠点としての鎌倉に鎌倉府を置き、室町に將軍、鎌倉に公方を置く謂わば二頭立ての武家支配体制を敷いた。夫々に自分の子の義詮・基氏をその任に当らせたが皮肉なことにこの権力二重構造が以後その二つの権力が抗争を繰り返す混乱の元となった。

② 永享の乱と金沢合戦

尊氏がその子基氏（義詮の弟）を初代鎌倉公方に任じて始まった鎌倉府は、早くも 2 代氏満になると室町幕府から離反する方向へと進んで行く。関東公方は室町幕府の風下に甘んじる事を潔しとせず、むしろ自らを鎌倉將軍家を継

承する政権と意識するようになっていった。

かくして、関東公方の 2 代氏満・3 代満兼・4 代持氏はいずれも室町將軍の義満・義持と対抗する姿勢を示した。政変の起きる度に、相互に武力介入し、挑発や牽制を繰り返した。関東管領の上杉氏はその度ごとに公方を宥め抑える役割を果たしていたので、公方満兼の代までは辛うじて幕府と鎌倉公方の直接対決は回避された。

ところが、正長元年（1428）將軍義持が後継者を決めないまま死去すると、管領畠山満家らの幕臣は義持の弟 3 人の中から「くじ引き」で僧籍にあった義円を將軍とした（義円は改名して 6 代將軍義教）。義教は將軍となると独裁的専権を振り、その政治は「万人恐怖」の政治と言われた。

かくして室町と鎌倉との対立はますます激化し鎌倉公方持氏は、義教の將軍着任を認めず、永享の年号使用さえも一時拒否した。永享 10 年（1438）春、公方持氏は嫡男賢王丸の元服を迎えると、鎌倉公方家では元服の際は必ず京都に願い出て將軍の名を一字貰い受けるという慣例を無視し、管領憲実の諫言も聞き入れず元服式を強行し、賢王丸を義久と名乗らせた。それまでも、何かにつけて対立してきた公方と管領は、ここに至って遂に武力衝突の事態となり、これを知った將軍義教は 8 月憲実援軍の兵を送り、ここに関東一円に戦乱を広げた永享の

乱を招来することとなった。

関東全域に及ぶ戦鬪の拡大に、敗色濃厚となった持氏は11月称名寺に入り、剃髪して降伏の意を示した。しかし主戦論を唱えていた持氏方の上杉憲直・一色直兼らと幕府・憲実方の長尾忠政軍との衝突が起り金沢一帯特に寺前・町屋辺りでは凄惨な戦鬪が繰り広げられた。これを「金沢合戦」と言う。

この戦いによりそれまで持氏らが相当の支援をして守ってきた称名寺も、大きな被害を蒙っている。その後、持氏は二階堂の永安寺に閉じ込められて謹慎していたが、義教はこれを許さず兵を向けて永安寺を攻めたので自害して生涯を閉じた。又嫡男義久も報国寺で自害。時に永享11年(1439)2月のことであった。

③ 上杉氏

上杉氏の祖は藤原氏の一族の重房で、建長4年(1252)鎌倉幕府の6代将軍宗親親王に従って、京都から鎌倉に下向して武家となった人物

である。幕府から丹波の上杉庄を所領として与えられ、藤原を改めて上杉を名乗った。

一族は、その住まった地域によりそれぞれ犬懸・宅間・扇ヶ谷・山ノ内と呼ばれる四家に分かれた。この中で宅間上杉だけは関東管領を出していないが、他の三家はいずれも管領の任に当っており、中でも山内上杉家が最も多く務めている。関東管領は関東公方の補佐役で、はじめは斯波・高・畠山の3家が執事として義詮・基氏を支えたが、正平18年(1363)基氏が上杉憲顕を関東管領に取り立てた以後は、上杉一族がその任を司っている。

しかし、宅間と犬懸はやがて消滅し、扇谷と山内は互いに相争ううちに両家とも天文15年(1546)小田原北条との戦いに敗れ、扇谷上杉は滅亡し、山内上杉は越後に逃れて長尾政虎に上杉姓を譲り消え去った。

(田中 記)

アンケート結果

① 全体評価

大変良かった：19、良かった：15、普通：1、つまらなかった：0

② 良かったこと

- ・金沢合戦、丁寧な説明で分かり易かった(10)
- ・テキストの整理が見事で分かり易かった(5)
- ・上杉氏や安達氏などの関係がある程度理解できた(4)
- ・歯切れもテンポも良かった(3)
- ・朝廷や幕府さらには公方など
京都、鎌倉の関係がある程度理解できた(2)
- ・金沢合戦と上杉氏について理解を深めることができた(2)

③ もっとも印象深かったこと

- ・この地に戦い(金沢合戦)があったこと(7)
- ・熊谷講師の造詣の深さに感服。そのご努力に頭が下がります(6)
- ・鎌倉幕府滅亡からの騒然とした時代が時系列表に示されこと(2)
- ・錯綜する将軍、鎌倉幕府、関東管領などが分かり易く説明された(1)
- ・古河公方への経過が理解できた(1)
- ・どの国、どの時代にも権力争いのあること(1)

熊谷 哲 氏



「懐かしの映画」鑑賞録 No.9

「懐かしの映画を観る会」代表 佐藤 晃

平成 24 年度 第 14 回 鑑賞会

午後の遺言状

〈鑑賞日：2012・10・22〉

制 作：1995 年 日本ヘラルド映画 上映時間：112 分

監 督：新藤兼人

脚 本：新藤兼人

出 演：杉村春子、乙羽信子、観世栄夫、朝霧鏡子、瀬尾智美

その他：日本アカデミー大賞、キネマ旬報ベストテン1位

あらすじ

夏の蓼科高原の別荘に女優・森本蓉子（杉村春子）が避暑にやってきた。30年の間、別荘を任せている管理人の農婦の豊子（乙羽信子）が出迎える。言葉は乱暴だが、きちんと仕事をこなす豊子に蓉子は絶対の信頼感をもっている。豊子の22歳の娘、あけみ（瀬尾智美）は時々仕事を手伝い、娘のいない未亡人の蓉子はわが子のように可愛がっている。別荘に蓉子の古い友人の牛国夫妻（観世栄夫、朝霧鏡子）がやってくる。夫人の登美江と蓉子は築地小劇場時代の仲間だった。しかし、登美江は認知症を患っており、様子がおかしい。夫の藤八郎は妻を優しくいたわり、元の登美江に戻そうと努めている。その日、強盗が入り、拳銃で脅すが、認知症の登美江はひるまずに隙をみて立ち向かう。その

間、警戒中の警察官が難を救った。逮捕劇に協力したとのことで、警察署長から感謝状が出ることになり金一封を受け取り、ホテルで祝杯をあげたが金一封は一万円で、大赤字である。翌日、牛国夫妻は故郷に帰り、やっと落ち着いたが、近く嫁入りするあけみは実は豊子と蓉子の夫三郎（津川雅彦）との子供だったという豊子の爆弾発言から二人の仲は険悪となる。しかし、豊子に「あなたは亭主より芝居を選んだのよ」といわれ蓉子は妙に納得してしまう。あけみのこの地方の旧習である足入れ婚の儀式に蓉子は参加し、舞台への思いを募らせる。翌日、女性ルポライター（倍賞美津子）が牛国夫妻の心中を伝える……



解 説

『人は生きていくかぎり、生きぬきたい』。この言葉は「午後の遺言状」撮影前に新藤監督が書いた言葉である。平成4年、80歳になった新藤監督は「老人は世間の人が思っているように達観しているわけではない」と実感し、老いの実相を描きたいと思うようになったという。

主演は当時80歳半ばになっていた杉村春子を想定し、親交のある乙羽信子を通じて打診し、快諾を得てこの映画が誕生した。「午後の遺言状」というタイトルも意味が深い。人間の後年、60歳以上を午後という言葉で表現し、午後の明るい光を浴びて生き抜く老人たちには暗いイメージはない。蓼科の山荘を舞台に大女優と山荘の管理人を中心にして織りなすドラマは老

いと死をテーマにした味わい深い映画である。老いの対極に若者の「足入れ婚」の儀式を置き、老いること、生きることへの意味を問いかけた。

撮影時、乙羽は肝臓ガンを患いながら女優最後の演技をした。新藤監督、乙羽信子のコンビの映画は43作を数えるが、この映画が最後の映画となった。撮影終了2カ月後の12月22日に乙羽信子は亡くなった。享年70歳。杉村春子も3年後に亡くなり(享年88歳)、この映画は両大女優の遺作となった。新藤兼人も2012年5月29日100歳で死去し、この映画に登場した朝霧鏡子、観世栄夫もすでに亡く、皆、泉下に眠っている。

平成24年度 第16回 鑑賞会

蜘蛛巣城

〈鑑賞日：2012・11・26〉

制 作：昭和32年 東宝映画

監 督：黒澤 明

原 作：シェークスピア 「マクベス」より

脚 本：小国英雄、橋本 忍、菊島隆三、黒澤 明

出 演：三船敏郎、千秋実、志村喬、山田五十鈴

あらすじ

山間にそびえている蜘蛛巣城の要害。城主都築国春のもとに使の武者が馬を駆って戦況を伝える。北の館を預かる藤巻が謀反し、五の砦、四の砦、三の砦が落ち、二の砦三木義明(千秋実)、一の砦鷲津武時(三船敏郎)奮戦中との知らせである。城主以下諸将は籠城を覚悟するが、続いての使者は三木、鷲津の奮戦により危機を脱し、藤巻は降伏したという知らせを伝えた。謀反を収め、城主に報告するために三木、

鷲津の二人は馬を駆って「蜘蛛手の森」を抜けるが、途中、道に迷い、藁屋の中で糸を繰りながら歌を歌っている老婆(浪花千栄子)に出会う。老婆は二人に「鷲津は今宵より北の館の主になり、三木は一の砦の大将になり、やがては鷲津は蜘蛛巣城の城主になる。三木の子は鷲津の次の城主になる」と予言した。二人が老婆に視線を戻した時、老婆は消えていた。

城主の前に伺候した二人に、城主は二人の労

をねぎらい、「鷲津は今宵より、北の館の主、三木は一の砦の宰領じゃ」と告げた。武時の妻の浅茅(山田五十鈴)は武時より森の老婆の予言を聞いていたが、北の館に移ってから武時に、「三木が老婆の予言を大殿に漏らされたら、こ

のままではすまない。大殿は自分の地位を脅かす者として、殿を殺すだろう。生きるためには大殿を殺すしかない」と大殿殺害を迫った。折しも、隣国の宿敵乾を攻めるため蜘蛛巣城を訪れた国春をその夜、浅茅と武時は殺害した……

解 説

シェークスピアの「マクベス」を、日本の戦国時代にあてはめて、黒澤明が映画化した。脚本は小国英雄、橋本忍、菊島隆三、黒澤明の四人が書いた。脚本は、原作の持つ雰囲気を忠実に生かし、時代、国境を越えて、人間の欲望と裏切りのドラマとして普遍性を持たせた。骨太のドラマ作りは黒澤の得意とするところで、黒澤マクベスは、マクベス翻案ものでは最高の映画とされている。

黒澤はかねてより、能に興味をもち、勉強をしていたが、この映画では、能の演出を取り入れた。特に浅茅を演ずる山田五十鈴の立ち居振

る舞いは能舞台の演技である。俳優たちの表情も、能のその役にふさわしい面をその俳優に見せて研究させたという。また、中井朝一のカメラは、もやの立ちこめる森、しのつく雨、風の吹き荒れる原などを墨絵のように写し、幽玄の世界を創造した。

こうしてみると「蜘蛛巣城」は、黒澤の後年の様式美の極致となる「影武者」(1980年)、「乱」(1985年)の実験作でもあった。

平成 24 年度 第 17 回 鑑賞会

史上最大の作戦 The Longest Day

〈鑑賞日：2012・12・10〉

制 作：1962 年 アメリカ映画 上映時間：178 分

監 督：ケン・アナキン、ベルンハルト・ヴィッキ
アンドリュー・マートン、エルモ・ウイリアムス

原 作：コーネリアス・ライアン「史上最大の作戦」

出 演：ジョン・ウエイン、ロバート・ミッチャム、ヘンリー・フォンダ
エディ・アルバート、リチャード・バートン、クルト・ユルゲンズ

その他：アカデミー撮影賞(白黒部門)、特殊効果賞受賞

あらすじ

1944年6月、フランス、ドイツ軍司令部。傍受したイギリスBBC放送が「私はシャム猫が

好き……秋の日のヴィオロンのためいきの……」と伝える。情報将校がヴェルレーヌの「秋の

歌」の第二節が送られてきたら24時間以内に上陸作戦が行われるという噂があるという。西部軍総司令官は暗号文を手にして、暗号を無視すると部下に伝える。同じころドイツ総司令官のロンメルも、副官に嵐が近付いているから、この1週間上陸はないといい、ロンメルは妻の誕生日の祝いのため、休暇を取ってドイツに向かう。イギリスでは連合軍総司令官アイゼンハウアーが6月6日、嵐をついての上陸作戦開始を決断する。

フランスのレジスタンスの隠れ家のラジオ

解 説

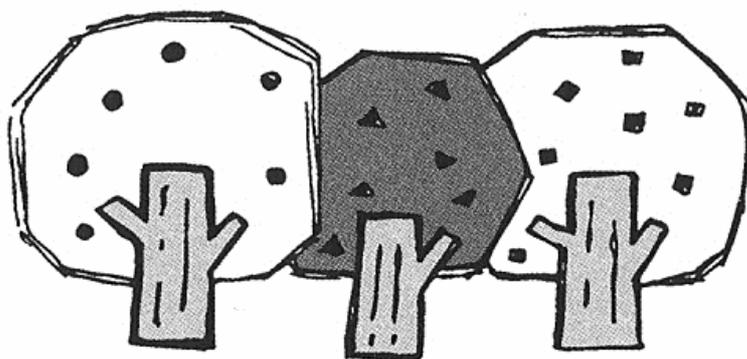
コーネリアス・ライアンによるノンフィクション「The Longest Day」を元に映画化された。40億円以上の巨費を投じた大作である。ケン・アナキンをはじめ4名の監督のもとに、ジョン・ウェイン、ヘンリー・フォンダ、ロバート・ミッチャム、リチャード・バートン等の大スターを揃えたまさにオールスターキャストの映画である。戦勝国側に立った映画であるが、ドイツ側の視点をも加え、ドキュメンタリー風の作り方は臨場感溢れる映画となった。

戦争映画は、たとえ、勝利者側に立った作品

から、「秋の歌」の第2節「身に沁みてひたぶるにうら悲し」が流れ、隊員はそれぞれ持ち場に向かう。海を埋める輸送船団と護衛艦隊、空には空挺部隊が降下地点のサント・メールに接近し、落下傘が開く。沼に落ちる兵士、街中に降りる兵士、街にはドイツ兵が銃を手に空挺部隊の兵士を狙い撃つ。ノルマンディ海岸では、トーチカの銃眼から大船団を発見した将校は「進攻だ」と叫ぶ。艦砲射撃が始まり、上陸用舟艇が海岸に殺到し、上陸を開始する……

であっても、リアルであればあるほど戦争の残酷さを消し去ることはできない。一つ一つのショット、例えばオマハ海岸の激戦や、立木にぶら下がった落下傘部隊兵士の死体など画面の示す、メッセージは強烈である。

1998年、スティーブン・スピルバーグはノルマンディ上陸作戦を題材として「プライベート・ライアン」(主演トム・ハンクス)を監督し、その年のアカデミー賞で監督賞をはじめ5部門で受賞した。



「浮雲俳句会」抄録 No.20

「浮雲俳句会」代表 北野 清市

【 月：MOON 】

地球の回りを公転する唯一の衛星。月は、古来、花とともに美の中心におかれ、それぞれが秋と春を代表する一大季語となっている。俳句において、花といえば春のサクラの花をさし、月といえば秋の月をさす。

この月。その満ち欠けによって、初月・二日月・三日月・弓張月と光を得て大きくなり、やがて満月となる。また欠けて有明の月…新月となる。

因みに、月は、昔から詩歌によくとりあげられているが、和歌から見ておきたい。

月見れば千々にもものこそ悲しけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど (『古今集』)

木の間より漏り来る月の影見れば

心づくしの秋は来にけり (『古今六帖』)

次に、俳句では、

義仲の寝覚の山か月悲し 芭蕉

月天心貧しき町を通りけり 蕪村

これらは、月を秋の美の頂点におき、さびしさ、物思い、ものかなしい情感それに歴史の厚味まで詠っている。

一方、名月（傍題として…明月・満月・望月・月今宵・良夜）に絞って見ておきたい。

和歌では、「月ごとに見る月なれどこの月の今宵の月に似る月ぞなき (『後撰集』)」とその清光爽凌の美は、他にくらべるものがない。

また俳句では、芭蕉に「名月や池をめぐりて夜もすがら」、其角に「名月や畳の上に松の影」、蕪村に「月今宵あるじの翁舞ひ出でよ」、一茶に「名月をとつてくれろと泣く子かな」などがある。

更に大正時代以降の「名月」の傍題だけに限って、5句掲げておきたい。

十五夜の雲のあそびてかぎりなし 後藤夜半

けふの月長いすすきを活けにけり 阿波野青畝

満月の冴えてみちびく家路あり 飯田龍太

この良夜海にあらむと漕ぎ出づる 佐野まもる

生涯にかかる良夜の幾度か 福田蓼汀

なお最後に、『 月 ; MOON 』の基本的事項を付記しておく。勿論月は、地球の衛星。地球からの平均距離は38万キロ。半径は地球の約四分の一。約一ヶ月で地球を一周する。

《13回金沢区民俳句大会吟行会への参加 H24年10月28日》

今回の区民吟行大会は、前年に引き続き野島公園界隈で実施。多くの結社から参加頂き、〔秀作〕3句中、天賞と人賞を、また〔特選〕4句中2句を、わが浮雲俳句会のメンバーが勝ち取った。

〔秀作〕

天賞 鴨一声稲荷神社の静寂かな 十九

地賞 草の実の触れば弾け磯日和
(他の結社)

人賞 紺朝顔野島灘子にゆらぎおり 国眼

ここでは、わが「浮雲」のメンバーの句に絞って、選評しておきたい。

先ず、天賞は、臨場感溢れる囁目吟。吟行を終わったあとの大会会場が野島公園の青少年研修センター。そのすぐ東サイドに〈稲荷神社〉。そこは、急峻な野島山の崖の階段を登った処。人通りも殆どない〈静寂〉な場である。そこに突然、〈鴨〉が来て、キヤーと〈一声〉。しじまの空間にコダマしたのである。

作者は、これらの目に触れたことを、即座に即物写生し、見事な囁目吟に仕立てたのである。

次に、人賞は、発見の驚きの即物写生句。吟行先の旧伊藤博文金沢別邸は、復元祭の真っ最中。選者も裏木戸から覗いてみた。すると、入ってすぐ左サイドの垣根一杯に、紺色の朝顔が、10輪余り咲きほこっているのに、ハットしたのである。

これを発見した作者。その驚きを即座に、写生したのである。加えて、当日は、別邸の

復元祭のいろんなイベント行われていた最中のこと。即刻、〈野島灘子に〉 〈紺朝顔〉が、〈ゆらぎおり〉と詠いあげたのである。

〔特選〕

野島沖よぎるタンカー秋深し 岩介
たぶたぶと秋潮たたく博文邸 とも女
鯊釣の上を電車の野島橋 (他の結社)
賑わいの野島の磯の新松子 (他の結社)

ここでも、わが「浮雲」のメンバーの句に絞って、コメントしておきたい。

先ず、1句目は、典型的な客観写生句。〈野島沖〉の東京湾は物流の大動脈。中東から満載の油を積んだ〈タンカー〉が、ゆっくりと通り過ぎている。吟行の基本は、素直に物を見、感動したことを、率直に叙してみることである。掲句は、まさにこの吟行の基本を地でゆく、典型的な囁目吟。

次に、2句目は、擬態語をうまく活用した吟行句。〈たぶたぶ〉は、大量の液体が容器の中で揺れ動く音もしくはその様子。「たぶたぶ」に比べて、弾みを保って揺れる感じがある。加えて、タ音＝「タぶタぶと…タタク」が、句にリズムと調べを与えて絶妙。

したがって、これらのため〈博文邸〉が、すぐ前の〈秋潮たたく〉東京湾の中にあるような、錯覚すら覚える。とにかく、その巧みな表現が、素晴らしい佳句を生んでいる。

〔 秀作 〕

天賞 鰯さばく手つきあざやか浜をんな
勝美

地域に根ざした生活俳句。まず、鰯（ぶり）について、簡潔にふれておきたい。鰯は、北海道から台湾の各地に分布する沿岸性の回遊魚。成長すると全長 1.5 メートルにも達する。鰯は一般に春から夏に日本近海を群れをなして北上し、秋から冬には南下するので、その通路に定置網をはって、漁獲するのが通例。重要な食用魚で肉は美味。とくに冬季は、あぶらがのり、「寒鰯」といわれて賞味される。

このような鰯。地元の法事か誕生会に呼ばれ、昔とった杵柄（きねづか）で、〈浜をんな〉が〈手つきあざやか〉に〈さば〉いたのである。普段使う平易な言葉で、上 5 から下 5 まで、一息に詠みあげた措辞が格別。それだけにリズムがよく、一読したら語んじられる秀句である。

地賞 冬帝や忽必烈のごと席捲す 一馬

〈忽必烈（フビライ）〉は、蒙古（もうこ＝現在のモンゴル）帝国第 5 代皇帝。しかも 1276 年中国を統一して初代元（げん）朝の皇帝に即位。わが国へも「蒙古来襲」で知られているように、二度にわたって、隠岐・対馬・博多付近を攻撃した。

なお〈席捲（せっけん）〉は、片っぱしから土地を侵略すること。なおまた〈冬帝〉は、「冬」の季語＝「冬」という兼題からでた傍題の一つである。

いずれにせよ掲句は、歴史上の一大スペクタ

クルを 12 文字に展開した見事な一句である。

人賞 炉が点り島影三つ瀬戸の海 とも女

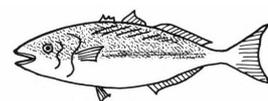
郷愁を誘う適確な写生句。選者は備前倉敷生まれである。塩飽諸島のど真中。すぐ前に釜島・松島・六口嶋の三島が、海峡ごしに点在。この景を詠まれたものと、一瞬、ドキッとし、ノスタルジックになったのである。しかし、よくよく考えてみれば、瀬戸内海は、“島かと思えば岬なり”といわれるように、どこにもこのような景は存在するものだ。

いずれにせよ掲句は、〈炉が点り〉とあるので、これまた一昔前の回想であろう。ところが、今では、本州四国連絡橋のうち、児島・坂出ルートは瀬戸大橋が、南北方向に架けられている。更に〈炉〉からいえることは、今では電化製品のいろんな熱源が、出回っているのでは、状況は一変しているといえよう。

兎に角、夕日に映える〈島影三つ〉〈瀬戸の海〉は、ひとつの郷愁とし、あるいは思い出として、心に刻まれているのである。

〔 特選 〕

寒禽の声こだまする円海山	十九
小春日や円海山のたたら跡	重九
冬將軍いつきに馳せて由比ガ浜	国眼
冬將軍微動だにせぬ六地蔵	祥代
屋根濡れて一身田の報恩講	二祥



[秀作]

天賞 静座して終筆の止め師走かな 国眼

書道の納め会における書の迫力にせまった秀句。一般的に習い事は、一年の最後の月＝師走にその納め会を行うのが通例である。作者の通う書道の会でも、その納め会があった。そのとき作者は、〈静座（正しい姿勢ですわり心身を静かにすること）〉して、納め会最後の書。

〈終筆の止め〉で締め括ったのである。

漢詩の修辞法に、「起承転結」がある。これは第一句で全体の意を起し、第二句で受け、第三句で変化させ、第四句で結ぶのだ。また書道のプロの審査員は、その書の起筆と終筆だけを見て、審査に当たっていると聞いたことがある。それだけに終筆が肝心であるといわれているが、そのなかでも、字の最後の終筆の〈止め〉が、最も大切らしい。

この点、作者は、全身全霊をその〈止め〉に込め、今年最後の納め会を終えたのである。

地賞 雪まとふ女神の如し安達太良山

とも女

安達太良の特徴をよく捉えた福島の大震災応援俳句。安達太良山は、福島市と郡山市の間に横たわる海拔 1700 メートルの山岳。なだらかで女性的な感じの山。勿論日本百名山の一つ。文学的には万葉時代から詠まれ、高村光太郎の『智恵子抄』が有名である。

〈安達太良山〉は、福島県のほぼ中央に位置している。そこへ、〈雪まとふ女神〉が、福島

の被災地の復旧復興の応援にやってきてくれたのである。

わが国の山岳は、もともと山岳信仰により、神の宿るところとされてきた。因みに、安達太良山にも、中腹の沼ノ平に小さな祠があり、山の安全を守って頂いている。しかし、2011年3.11以来、山の〈女神〉も加わって頂いているのだ。

人賞 帰源院師走の風と『門』くぐる 一馬

漱石の忌日に因む関連俳句。〈帰源院〉は、鎌倉の円覚寺の塔頭の一つ。一時夏目漱石が逗留。そのときの体験を小説『門』に書いたといわれている。『門』は、『それから』『三四郎』に続く三作目の作品。朝日新聞に連載された漱石の長編小説である。

漱石の忌日は 12 月 9 日。作者は、その頃円覚寺に参詣。入口右手の小高い丘に登り、漱石が逗留していた〈帰源院〉に向かったのである。更にいえば、〈帰源院〉の門を〈師走の風〉に押されながら、〈くぐ〉ったのである。そして漱石を偲び、小説『門』を想いつつ、漱石に対する畏敬の念を、一層深めたのである。

[特選]

したみ酒汲みてしまひし師走の夜 一幸
泥付きのふるさと野菜くる師走 十九
冬晴れや金の筋引く飛行雲 勇平
ししおどし寒さしみ入る狭庭かな 二祥
石焼芋すつかり諍ひ忘れさせ 重九

「ふれあいの道歩こう会」

10周年記念事業ご案内（Ⅱ）

「ふれあいの道歩こう会」代表 宮原 宏至

(1) 「ふれあい記録第3集」発行

ふれあいの道歩こう会では10周年記念事業の一つとして「ふれあい記録第3集」を3月初旬に発行いたします。

内容は発足以来の歩行記録集約、会員の声、栃木・茨城・千葉県コースの各回毎の「ふれあい記録」などです。全体で88ページ。

配布は“わ”の会の運営委員、元代表、各分科会代表、ふれあいの道歩こう会会員、と各分科会に回覧用として各2部を予定しています。

上記以外の方で配布をご希望の方は2月23日（土）までに、宮原（TEL・FAX 045-783-4539）へお申し込み下さい。無料。

(2) 記念ハイキング実施

ふれあいの道歩こう会10周年記念ハイキング・パーティ（4月3日弘法山・横浜西口）は会報第43号でご案内し、ご希望の方はお申込みいただいております。まだお申込みされていない方でご参加希望の方は**2月28日（木）までに宮原（TEL・FAX 045-783-4539）へお申し込み下さい。ハイキング参加費無料。パーティ3,000円（女性2,500円）**



弘法山公園

「寺社を巡る会」バス旅行記 『日蓮上人誕生の地を訪ねる』

「寺社を巡る会」 吉田 壽紀

「寺社を巡る会」の特別探訪の希望地として、ここ数年いつも“二番手”に甘んじていた安房の地探訪が今年は幸いにもやっと実現した。

11月29日の探訪当日は、昨日までの寒さも緩み快晴の絶好のバス探訪日和となった。集合場所には会員33名、ビジター9名合わせて44名が集合し、役員さんが飲み物、つまみなどをどっさり積み込み予定通りに出発。

バスは首都高速から東京湾アクアラインに入り、まずは「海ほたる」で休憩。エスカレーターで上層階へ行くと、東京湾を行き交ういろいろな形の船、羽田空港に発着する飛行機が見られ、さらに雪をかぶった富士山が遠望できる。

休憩後、いよいよ千葉に入り、山道の紅葉を楽しみながら探訪一番目の鏡忍寺へ向かう。鏡忍寺では地元のボランティアガイドと合流し、門前横のちょうど見頃のイチョウの黄葉の下で案内がスタート。

日蓮はその生涯で多くの法難を受けたが、3大法難の一つである「小松原法難」はここ小松原の地での起きた事件である。

日蓮は天津城主工藤吉隆の招きで天津へ向かう途中、小松原で地頭東条景信の襲撃に逢った。工藤吉隆は小松原の急襲に接し救援に赴いたが、日蓮の弟子鏡忍房と共に討ち死にした。しかし日蓮は工藤吉隆の活躍もあって傷を負いながらもかろうじて難を逃れた。鏡忍寺はこの小松原法難より17年後、工藤吉隆の子日隆がその時襲われた鏡忍と工藤吉隆の霊を弔うため建立した。

寺の庭には法難があった時、鬼子母神が現れて日蓮を守ったと伝えられる樹齢1200年の「降

神の槓」が枝を大きく張り出し、この寺のシンボルになっている。

もう一つの見どころは、祖師堂欄間の七福神の透かし彫りで、地元鴨川の彫刻師武志伊八朗信(初代)36歳の時の作といわれている。ボリューム感・立体感たっぷりの彫刻で、なかなかの見ものであった。

次に、房州伊勢の宮といわれる天津神明宮へ。ここでは話術豊かな神主さんから冗談を交えながら案内をして頂いた。神代の昔、事代主神が東方鎮護の神としてこの地に鎮まりになり、社を建て明神(えびす様)として崇拝されてきた。



天津神明宮

石橋山の戦いに敗れた源頼朝が安房の地に来たとき、再興を祈願して伊勢神宮の分霊を寿永3年(1184)に勧請、明神と共に祀って「房州伊勢の宮」とした。日蓮もここに参拝したと伝えられ、日蓮自筆の曼荼羅が社宝として残っている。式年遷宮は20年に1回社殿を新しくし神々をお移り頂く事であるが、ここでは鳥居を20年に1度新しくしているそうで、節約方法と

して賢い方法だと感心した。

昼食後はバスで山道を登り、のどかな山里の清澄寺へ移動。ここで朝と同じボランティアガイドの案内で清澄寺を参拝した。私はこの寺を昔からの日蓮宗の寺と思っていたが、戦後に日蓮宗に改宗されたと知りびっくりした。

清澄寺は寺伝によると、宝亀2年(771)、不思議法師と呼ばれる僧が虚空蔵菩薩像を刻み、一字を建て安置したのが始まりといわれる。その後、平安時代の初め、比叡山延暦寺中興の祖として知られる慈覚大師円仁が来山して天台密教を伝え、不動明王を祀り天台宗の寺として再興した。のちに日蓮が当寺で得度、題目を唱えて布教活動を始めたが、寺はその後衰退していった。徳川秀忠の時に、真言宗に改宗し徳川家の帰依厚く寺運は隆盛した。しかし、明治に入り廃仏毀釈にあい荒廃した。昭和24年に日蓮宗に改宗され、僧の認定式が行われる宗門直轄の大本山になったそうである。



清澄寺にて

次は、バスで山を下り海辺に近い日蓮宗誕生寺へ。壮大な仁王門をくぐると、石灯籠が両側にずらり並び、石畳の向こうには龍の彫り物が素晴らしいどっしりした祖師堂が配置されている。この寺の元は、日蓮の弟子日家が建治2年(1276)、日蓮の生家跡に一字を建立し、高光山日蓮誕生寺と称したのが始まりである。しかし、明応7年(1498)と元禄16年(1703)の地震津波により海中に没してしまった。その後、26

代の日考が宝永年間(1704~11)に、今の朝日山麓に水戸徳川家の寄進を受け七堂伽藍を再興、小湊山誕生寺と改称した。



誕生寺祖師堂前の石灯籠

参拝している間に、鯛の浦の観光船の最終便の時間14時50分が迫っていたので急ぎ船着き場へ。乗船するとすぐに出発し、10分くらいで鯛の浦に到着。船頭さんが餌をばらまくと立派な鯛の姿がちらほら見えるが、朝から餌を食べすぎたのか鯛たちの動きが鈍い。今にもっとたくさん鯛たちが出てくるのかと期待していたが、間もなく船は引返し元の船着き場へ。以上団体割引で御一人様850円也。コストパフォーマンスの低さに大いのがっかり！

鴨川小湊を後にバス探訪の定番である酒蔵へ急ぐ。バスが小泉酒造に到着すると、皆急いで『酒匠の館』に吸い込まれるように入館。この酒蔵は、寛政5年(1793)、名字帯刀を許された小泉平蔵が、小泉酒造を鹿野山の麓に位置したこの地に興したそうで歴史の大変長い蔵である。ここで各自の好みの酒や旨そうなつまみを土産に買い帰路についた。

バスの中では、たくさんの方々から差し入れて頂いた美味しい酒を飲み、いい気持ちになり、あっという間に帰着地金沢文庫に到着した。

皆事故もなく無事バス探訪を終えることが出来た。お疲れ様でした！

「無法松の一生」を懐かしむ

渡邊 紀一

今、机上には本と云うには余りにささやかな何かの冊子を思わせる儂げな文庫本が置かれている。見ようによっては寂寥感さえ漂うようである。緑色帯に白抜き文字で“無法松の一生 岩下俊作”の活字が浮き出ている。私にとって映画と共に少年期の懐かしさが伝わってくる本である。因みに奥付きとは見ると1960年5月30日第3版発行。定価は50圓とある。また、本の価値を制するものではないが頁は100にも満たない。完本である。手にとって顔を近づければ古紙独特の埃っぽい匂いがする。装丁は変色し、破れかけたハトロン紙で覆われただけの諸兄にはお馴染みのあの懐かしき角川文庫である。如何にも疲れた感じの本であることは否めない。その有るか無きかの存在は疎まれることもなく引っ越しのたびに段ボール箱に放り込まれたのであろう。川崎、大分、岩手、横浜・金沢と数度の転居にも紛れることもなくここに厳然とあるのが不思議である。多分、この本はこのまま生涯、手放すことはないだろうと思う。愛読した記憶が無い。徒に年を取らせてしまったようで可哀いそうなヤツと思う。しかし、私にとって珠玉の掌編小説だったことは間違いない。

この本の解説の末尾には「1958年4月18日九州若松にて 火野葦平」と結ばれている。そして、その二年後、1960年1月14日自宅書斎で死去。享年53歳。友人によって遺書めいたメモを記したノートが発見された。「死にます。芥川龍之介と違うかもしれないがある漠然とした不安のために。すみません、お許し下さい」。このことは13回忌に遺族からマスコミを通じて発表され、社会に衝撃を与えた。火野葦平は

「無法松の一生」の原作者岩下俊作とは北九州若松の同郷であり文学仲間であり先輩格でもある盟友である。その葦平は1937年下期、「糞尿譚」で芥川賞を得ている。私は読んでいないが「雲古小説」の傑作であるらしい。機会があればぜひ読んでみたかったが未だ果してない。

そして3年後、「無法松の一生」と後に改題されるに至る「富島松五郎傳」が発表される。葦平に続けとばかりの強い意志が込められた渾身の作だった。果たして「富島松五郎傳」は第11回（1940年下期）直木賞選考の最終審査に残った。しかし、作者、仲間たちの期待も虚しく思わぬことで破綻する。時の審査委員の一人であった菊池寛は競合相手の女流作家の名前を挙げ「…女史は大病で寝ているそうだからそういう人に上げたらいいじゃないか」と理不尽とも思える裁定に岩下の無念さを感じず。芸春秋社の創立者であり、芥川・直木賞の創設者でもあった、文豪・菊池寛に物申す人物がいなかったのである。

不遇はまだ続く。やがて、「富島松五郎傳」は脚本家伊丹万作により「無法松の一生」と改題され稲垣浩監督により映画化されることになる。話題に事欠かない。「無法松の一生」は当たりを取り、後世にまで名を残す。このことを契機に運命が動き出す。著書「富島松五郎傳」は「無法松の一生」と代えられた。勿論文庫本の話ではない。出版社の意向であつたらしい。

「無法松の一生」は既に世間に流布している。商業主義が働いたと思うのは自然だろう。考えてみれば「富島松五郎傳」では成り上がりの実業家か或いは国会議員の伝記のようで興を唆らない。この改題は松五郎を世に送る大きな原

動力となったと思う。俊作は終生この題名を嫌ったと言う。忸怩たる思いがあったのだろう。

賞を逃したわけではない、以後、「無法松の一生」は著者の手を離れ一人歩きをする。既に「無法松の一生」は著者以上に名を馳せている。映画、芝居、浪曲、講談、歌謡曲そして清酒にまで無法松と冠せられる。この頃、岩下俊作は八幡製鉄職工だった。生前、彼は定年後、上京して作家生活に打ち込みたいと周囲に漏らしていたと云う。「富島松五郎傳」が直木賞を取っていたら定年を待たずして上京していたかもしれない。しかし、幸か不幸か以後、賞に値する作品に恵まれることはなかった。それを実力と云うならば賞を逃したことは決して不幸なことではなかったと思うのである。作者年譜によれば1960年55歳定年1980年1月73歳没。定年から没年まで短い期間ではない。悶々として歳月を費やしたのだろうか。案外、自らの手を離れてあれよあれよという間に成長していく無法松を目を細めて高みの見物をしていたのではないだろうか。

私が観た「無法松の一生」は1958年公開(東宝)、監督・稲垣浩、脚色・伊丹万作、主演・三船/高峰の作品で、前回一作目のリメイク版と呼ばれている曰くつきの映画だったのである。この映画は稲垣、伊丹にとってはリベンジとなるものであった。川崎の辺鄙な我が町には二番館、三番館しかなかった。翌年、迎えられたのを観たのだろうと思う。1958年は高校に入学した年である。高校生がどんな思いでこの映画を観たのだろうか。稲垣作品の「無法松の一生」一作目(1943年公開(大映)、阪妻版)は戦時中の検閲で映像の一部が削除された。問題の削除された部分というのは松五郎が軍人の未亡人への思慕がにじみ出る約10分間の場面とその息子・敏夫が「青葉の笛」を学藝会で歌う8分間であるらしい。この映画には常にこの話が付いてまわる。当時、軍人の未亡人の恋愛は戦地の兵士の士気を挫くと考えられた。然し削除することが却って松五郎の心情表現に含

みを持たせることになり観客の共感を招くとの意見もあったと、この時の検閲官の意見として残っているという。本当にこれを削除するのは惜しい、あと何年かすれば戦争も終わるのだからそれまで保留扱いにしてはどうかと漏らしたとも伝える。が会社側は問題部分を削除してでも公開しろと迫った。この映画1958年ヴェネツィア国際映画祭金獅子(グランプリ)を受賞している。まさに稲垣、伊丹は雪辱したのである。外国人にも日本人の原風景(孤独・哀感・無私・質実剛健・純粹・朴訥・一途)のような松五郎の人間像が理解できるものらしい。その後、「無法松の一生」はTV、ラジオ、舞台にと何度か上演された。既に日本の古典とも言える領域に達している。その中で映画化は1964年4月28日公開東映・伊藤大輔、三国連太郎/淡島千景。1965年7月14日公開大映三隅研次、勝新太郎/有馬稲子。わたしはそのどれも見ていない。私の中の無法松は三船敏郎だけなのである。また、TVドラマ化は下記の通りである。どれひとつ観た記憶がない。1957年、日本テレビ・田崎潤/坪内美詠子。1962年、フジ・須賀不二男/高倉みゆき。同年、NHK・田崎潤/津島恵子。1964年、フジ・南原宏治/南田洋子。

こうしてみると1960年代はTVに映画に「無法松」大ブレイクの感がある。日本人は無法松が大好きなのである。私にとっての無法松はこれ一本である。

しかし何があって原作を読もうとしたのか、きっと映画の何かに感動したのだろうと思う。そして見終って、今まで味わった事のない感想を持ったのだと思う。

この映画の圧巻は一つに祭に祇園太鼓を打つシーンであると思う。高校生になった敏夫は夏休み、祇園太鼓に興味を持つ教師を伴い帰省する。祭り当日、教師に所望され「蛙打ち」「勇み駒」「暴れ打ち」「流れ打ち」と興に乗って身を躍らせ打ちまくる松五郎の撥さばきは小気味の良いものだった。^{いぶか}訝しげに聞き入ってい

た町内の古老が聞き耳を立て回顧、感嘆し、太鼓の音色を聞いて、これが本当の祇園太鼓だ、あれは松五郎に違いないと言わしめた。此の古風な打法はいつ誰から習得したものか疑った。しかし、松五郎にしか知らぬことであった。小倉市民はこの時以後永久に本当の祇園太鼓を見聞きすることはなかったという。この日、松五郎は小倉市の英雄であった。恰も未亡人に対する思いを断ち切るように時に激しく、時に怒りをぶつけるように気負った松五郎の背の玉のような汗、あのシーンこそが高校生の私を感動させたものではなかったろうか。

松五郎が死ぬ一年ほど前、曇の降る寒い三月の宵、突然、酒気を帯びた松五郎は吉岡夫人を訪ねる（映画では花火の上がる夏の夜だったと記憶している）。座敷に通された松五郎は、吉岡夫人の正面に座ると沈痛な声で「奥さん、俺は寂しゅうて辛い、奥さん俺は…」松五郎の逞しい手が婦人の華奢な手をしっかり掴んだ。松五郎の激しい情熱に圧倒され化石のように凝

固した。松五郎は「奥さん、すまん」と身を翻し、風のように闇に消えた。（削除された問題のシーンとはこの事か）。松五郎が吉岡夫人に思いのたけを吐露したのはこの時だけである。そしてこの時以後、松五郎は永遠に吉岡家を訪れることはなかった。

大正8年（1919）5月7日、松五郎は48歳で孤独のままに死んだ…と原作は結ばれている。私にとっての松五郎は50年も前に観たこれ一本である。松五郎の哀れさを誘う物語である。

最近「無法松の一生」がNHK・BSで放映された。そして懐かしく観た。しかし、50年前の感動は蘇らなかった。50年の歳月は感動さえも褪せさせてしまった。月日の長さを今さらながら儂く、虚しく思う。50年も前の懐かしの映画が「太陽の季節」でもなく石原裕次郎でもなく、ましてやジェームス・ディーンでもなく三船松五郎と言うのが可笑しい。

納富 優 氏を悼む

熊谷 哲 小俣 悦男

“わ”の会の元会員の納富優（のうとみまさる）氏が平成24年11月16日に心不全で急逝されました。70歳でした。この数年来糖尿病が悪化し片目の視力が極端に低下し、好きなお酒が飲めなくなると嘆いていました。相共に『かねざわの歴史事典』の編集に深く携わり、編集会議の後に酒を酌みかわしたり、納富邸のお花見に伺ったことも思い出すと、余りにも早い別れに万感胸に迫る思いです。

奥さまは葬儀のときのご挨拶で「来世で再び

生を受けられれば優と共に今までと同じように楽しく過ごしたい」と言っておられました。奥さまとのロマンスについて私共は故人から度々聞かされておりました。終生愛情に満ちた素晴らしいご夫婦でした。彼の菩提寺は六浦の長生寺です。

“わ”の会に大きく貢献されました

①分科会「寺社を巡る会」に発足から参加。報告書『金澤と近郊の寺社を巡る』（平成17年）の

大半は彼の執筆による。「古文書を読む会」と「ふれあいの道歩こう会」にも一時参加していました。

②臨時学習会(オプション講座)(平成 17 年 12 月)で「六浦・金沢の地名と地形」と題して講演。会員が初めて講師を勤めた記念すべき講座だった。六浦・金沢の古代からの歴史、地形の変遷等について幅広く説明。特に『沙石集』(1283)

に出てくる「熊野法師が六浦湊で船を待つ間に見た夢」の話は記憶に残っている。

③『かねざわの歴史事典』発行の端緒となった『INDEX 金沢』の作成を提案(平成 15 年)。事典編集の中核的存在として活躍。調査の行き届いた明快な文章に圧倒される思いでした。新版編集には体調の関係で参加されなかったが、折節伺って意見を頂きました。

納富さんの生涯(私の知っている範囲で)

彼は昭和 17 年生まれ、翌 18 年 1 歳の時父が戦死されたので、父の顔を見ないで成長した。その後は母の実家の金沢(平潟から瀬戸)に移り、この地を本拠として生涯を貫いた。

母方の祖父竹中龍造氏(元海軍航空技術廠支廠長・海軍中将)の訓育の下、六浦小学校に入学、栄光学園を経て東京大学工学部(化学部門)を卒業。終生化学業界で活躍した。外国語(英語、中国語、韓国語など)が堪能で、世界中を飛びまわり、後年には外国企業との合弁企業の運営も手掛けたという。

金沢の地を深く愛し、探究心が旺盛で、歴史や地形などを工学的観点で調査・分析していた

ようだ。また六浦や釜利谷を盛んに自転車で早朝探訪していた。侍従川や宮川の全ての橋の様子を記録に残しているのには敬服した。酒は常温の日本酒を愛好、旅行好きで多趣味(麻雀、将棋、囲碁、ゴルフなど)だった。亀の置物の収集では 400 点を超え、落語のテープは 250 点以上と言っていた。

彼の私家本『金沢随話—歴史と心象—』の末

尾に「死に臨んで、やり残した事が多いと思える人が幸せ」と書き、「こう思えば、気が楽になる」と結んでいる(平成 15 年 10 月の記述)。



在りし日の納富さん

輝かしい系譜

父：納富健次郎氏は佐賀出身。海軍兵学校(以下海兵)62 期(昭和 9 年卒業)。航空母艦瑞鶴に乗り組み、飛行機隊長の時、昭和 18 年 11 月ブーゲンビル島沖航空戦で戦

死。2 階級特進して海軍中佐。30 歳前後であろう。遺影が納富家の仏間に掲げられていた。因みに山本五十六氏(海兵 32 期、連合艦隊司令長官、海軍大将)はこの年の 4 月にブーゲンビル島上空で戦死している。

母：竹中龍造氏の娘。

母方の祖父：竹中龍造氏は海兵 39 期(明治 44 年卒業)、艦船乗り組みが長く、昭和 14 年航空母艦飛龍艦長(海軍大佐、後少将)、昭和 18 年造兵部門に転じ海軍航空技術廠支廠長に就任。廠内の官舎に住み、数百名の技術士官・技師を指揮し、航空兵器の研究・開発・実験・戦術指導を強力に推進した。昭和 20 年 5 月中将に昇進。敗戦で軍籍を離れ、昭和 47 年 80 歳で没した。遺影が残されていた。

(平成 25 年 1 月故人の七七忌に当り熊谷・小俣記述、合掌)

康元元年(二三五六) 八月十一日

相州(時頼)の御息首服を加へられ、相模三郎時利と号す。後に時輔と改む。加冠は足利三郎利氏」

正嘉元年(二五七七) 二月廿六日

相州禪室の若公、御名は正寿七歳、御所において首服を加へらる。武州(長時)参進して理髪す。次に御加冠」

同年 十一月二十三日

越後守実時朝臣の息男十歳 相州禪室の御亭において元服す。越後四郎時方と号す。理髪は安達頼景 加冠は相模太郎 時宗 七歳

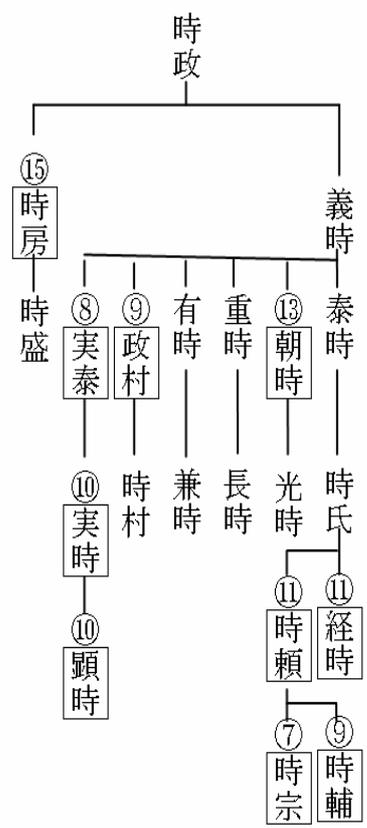
(注、後に顕時と改名)

二、注目したいのは

① 将軍家の三人と北条氏本家の四人の記述は当然のことながら、時房の系統、名越流(朝時の系統)、常葉流(政村の系統)は各一人。極楽寺流(重時の系統)、伊具流(有時の系統)は記載されていません。

② 金沢流は歴代の実泰、実時、顕時の三人を載せています。『吾妻鏡』の編集委員だった？金沢サンは身内に甘い性格のようです。或いは書き手が金沢氏の家臣であり主家に気をつかったのかも知れません。

三、元服の記載あるものを枠で囲む(数字は年令)。



- ⑫ 実朝
- ⑧ 頼経
- ⑥ 頼嗣

〔将軍家〕

訂正とお詫び

前号(四三号) 『吾妻鏡を読む(六)』二十一ページ 上段十一行三文字目と四文字目との間に欠落がありました。経営なり。すなわち加冠をなす。これ兼日の構えにあらず、所存」と挿入させていただきました。

編集の過程で不手際を生じてしまいました。筆者と読者の方へ心からお詫び申し上げます。

編集者

『吾妻鏡』を読む(7)
一元服の記事一

小倉 英明

一、今回は視点を変えて「元服」の記事を洗い出してみます。

文治五年(一一八九)四月十八日

北条殿(時政)の三男十五才、御所において首服を加へらる。

三浦義連加冠に候ず、名字時連五郎と云々」

(注、後に時房と改名)

建仁三年(一一一三)十月八日

將軍家(実朝)歳十二、御元服なり。遠州(時政)の名越の亭においてその儀あり」

建永元年(一一〇六)十月廿四日

相州(義時)の二男歳十三、御所において元服す。次郎朝時と号す。

建保元年(一一二二)十二月廿八日

相州鍾愛(しゅんあい)の若君九歳、御所において元服の儀、三浦義村加冠たるなり。四郎政村と号す」

建保二年(一一二四)十月三日、相州の子息、御前において元服。理髪は大内惟義朝臣なり。相模五郎実義と号す」

(注、のちに実泰と改名)

嘉禄元年(一二二五)十二月廿九日

若君の御方、御歳八御首服。理髪加冠は武州(泰時)、御名字頼経」

天福元年(一一三三)十二月廿九日

陸奥五郎(実泰)の子息小童十歳、武州の御亭において元服、太郎実時と号す」

天福二年(一一三四)三月五日

武州の孫子、時氏の嫡男歳十一、御所において首服を加へらる。理髪は相州、次に御加冠。北条弥四郎経時と号す」

嘉禎三年(一一三七)四月廿二日

左京兆(泰時)の孫子、小童字は戒寿、故修理亮時氏の二男十一歳。御前において元服の儀あり。駿河前司義村理髪に候ず、次に御加冠」

(注、時頼の元服)

寛元二年(一一四四)四月廿一日

將軍家の若君六歳御名字は頼嗣、御母は中納言親能卿の娘大宮局、御元服なり。武州(経時)参進し理髪加冠を勤仕せらる」

行事予定

2013年3月～5月の予定

注：表中の「CC」は「地区センター」の略

	3月	4月	5月
学習会	なし	なし	5月12日(土)能見台CC 定期総会 9:30～10:50 学習会 11:00～12:30 「私の映画遍歴」 懐かしの映画を観る会 代表 佐藤 晃氏
寺社を巡る会	3月7日(木) 集合:10:00 JR 港南台駅 テーマ:港南区中部地区 訪問先:安養寺、徳恩寺、春日神社、光明寺、天照大神宮	4月4日(木) 集合:10:00 地下鉄上永谷駅 テーマ:港南区西部地区 訪問先:貞昌院、永谷天満宮、正応寺、野庭神明社、福徳院(日限地蔵尊)	5月10日(金) 集合:9:30 地下鉄大門駅 テーマ:東京地区 訪問先:増上寺、浅草寺、富岡八幡宮、回向院、(江戸東京博物館)
古文書を読む会	3月14日(木) 10:00 金沢公会堂 柴村・斎田家文書 3月28日(木) 10:00 金沢 CC 旅中日記・伊豆半島編	4月11日(木) 10:00 金沢公会堂 柴村・斎田家文書 4月25日(木) 10:00 金沢 CC 大山・富士道中雑記	5月9日(木) 10:00 金沢 CC 柴村・斎田家文書 5月23日(木) 10:00 金沢公会堂 大山・富士道中雑記
ふれあいの道歩こう会	3月21日(木)(雨天22日) 独自コースNo.2 神奈川県 三崎・岩礁のみち	4月3日(水) 10周年記念ハイキング 秦野・弘法山 (雨天時はパーティのみ)	5月16日(木)(雨天17日) 独自コースNo.4 神奈川県 狩川沿いの道
懐かしの映画を観る会	3月11日(月)12:30 金沢 CC 恋のゆくえ (米) 3月25日(月)12:10 金沢 CC 人間の条件(1部2部) 独立	4月8日(月)12:10 金沢 CC 選考中 4月22日(月)12:10 金沢 CC 選考中	5月13日(月) 金沢 CC 選考中 5月27日(月) 金沢 CC 選考中
浮雲俳句会	3月31日(日) 9:30～金沢 CC テーマ:丹沢山地	4月28日(日) 9:30～金沢 CC テーマ:磐梯山	5月19日(日) 9:30～金沢 CC テーマ:三原山
パソコンを使いこなす会	3月5日(火) 金沢 CC EXCEL 復習講座 —⑨グラフ— 3月19日(火) 金沢 CC Windows 基礎講座 —Skype 電話—	4月2日(火) 金沢 CC EXCEL 実用講座 —表の並び替え— 4月16日(火) 金沢 CC Office 実用講座 —Office のリボン—	5月7日(火) 金沢 CC WORD 復習講座 —01-図形の基礎— 5月21日(火) 金沢 CC WORD 復習講座 —03-図形の応用—
	9:30～12:00	9:30～12:00	9:30～12:00

連絡先: 学習会 782-8147(小俣) 寺社を巡る会 784-1460(松本) 古文書を読む会 784-4900(真田)
ふれあいの道歩こう会 783-4539(宮原) 懐かしの映画を観る会 701-1606(佐藤)
浮雲俳句会 774-3878(北野) パソコンを使いこなす会 701-9775(林)

編集後記 大量退職時代を迎え、金沢区内にも多くの方が地域に根付こうとしています。 “わ”の会にも新しい仲間が加入し、運営委員会や分科会に参加して参りました。“わ”の会の継続発展において欠かす事のできない新しいエネルギーとして編集委員会においてもその立場で前向きに取り入れたいと思います。 会員の皆様の良いご意見や提言をお聞きしながら改革のエネルギーとして行きますのでよろしくお願い致します。 貝 田	発行日	平成25(2013)年2月16日
	発行月	4回(2, 5, 8, 11月)
	発行者	金沢区生涯学習“わ”の会
	編集長	大門 利晴
	編集委員	貝田 誠作 田中 徳明 伊達 一雄 吉田 寿紀 相川 勲 金間 誠一 金久保 常二